

眞に子供のため

倉 橋 惣 三

世の中に眞に子供を食ふ鬼は居ないかもしれない。併し、鬼と人間との中間位のもものは往々珍らしくない。或は貫子虐待とか繼子虐待とかの記事が新聞に度々出る。實に困つたことであります。そういふ特別の類のことは今日は申さない。處でそういふ半鬼半人間の連中を除けて仕舞へば、親として、大人として、誰れとして、「子供のため」を思はないものはない。子供のためを思はなければならぬといふ様のこととは、何も今更いふ必要のないことである。しかし、吾々はよく考へて、見なければならぬ。吾々の日常して居ることが、實際この心と眞に合して居るであらうか。考へ違ひ、思ひ違ひ、乃至一寸した不注意から、實は子供のためにならぬことを吾れ人ともに度々しては居ま

いか。色々の方面から厳しくお互を省みて見度い。

一 親を選ぶ權利

先づ吾々の第一に考へなければならぬことは子供を眞に幸福に生むことである。子供を愛するといふことが、子供が生れてから後に初めて初まるべきことと思ふのは、未だ充分深い愛心とはいへない。勿論情の上から起る愛は夫れで當然かも知らぬ。併し、我子に對する當然なる親の義務——即ち愛心の初まりは子供を如何に生むかといふ處から初まらなければならぬ。彼の不具の子供は誰れが生んだのです。彼の白痴兒は誰れが生んだのです。或は天命などいふて、人を慰め自分も慰めて居る。併し其の子供等の不幸の責は一體誰れにあるのでせうか。こういふ子供達の不幸の原因

を學問的に調べて見ると、多くは父親の不身持であるとか、懷妊中の母親の不注意であるとか、或は結婚の誤りであるとか、要するに何も知らない可憐の兒が、生れながらに親の罪を負はされて居るのである。しかも、子としては何處までも「生みの恩」を謝さなければならんといふのは、條理に於ては矛盾ではなからうか。有名なエレン、ケレーといふ人は「子供の世紀」といふ本を著して眞に子供の友としていろ／＼世間の大人達を誠めて居る中に「親を撰ぶの權利」といふことを言つて居る。そして其の中に「寧ろ生んだ罪を親から謝さねばならぬ方が遙に多い様である」といふ様な言葉がある。之れは一寸聞くと随分極端な過激な言の様であるし、又吾々として親の子としては如何なる場合にも、斯ういふことを思ひ度くはない。又、子供の方から赤旗でも翻へして、斯ういふ言をなして來るのでは吾々も忌やになるが、けれど

も之れは理に於ては事實である。少くも此の位までは大人自ら身を責める心は是非あつて欲しいと思ふ。「親の善惡子に報ゆ」とか「親の因果が子に報い」とかいふことは、見世物師の口上などで平氣で聞き慣れて居る様なものゝ、子供の友としては聞くにたえない悲惨の言葉である。但し私は斯ういふことを言つて、世の不具兒白痴兒の現在の親御に向つて、嚴しい無情なことをいふのではない。寧ろ私は、そういふ親御達と共に愛する子供達の爲に泣かうと思ふ。過ぎたことに鞭ふり上げて、かへらぬことを責めようとするのではない。たい之れから後を必ず慎み度いと希ふのである。嚴肅な遺傳の理や、細心な胎教の誠めの前に、吾々の心是非常に引しめて居たいと思ふのである。私は不品行に身を持ち潰して居る人々を見て常におもふ。大酒に骨を腐さらせ、其の危険を知りながら病毒に身を爛かして居る人々を見て常に思ふ。

何も六かしい理屈や高尚な教えの助けは借らずともいゝ、我が生む子供のためといふ心一つで、戦き怖れて身を慎まねばならぬではないかと。「親を撰ぶ權利」といふ語氣が荒過ぎるならば「親となる資格」といふ語で眞に子供の爲に自ら深く省みようではありませんか。

二 甘過ぎと辛過ぎ

子供を育てる程六かしいことはない。中にも、自分の子を育てる程六かしいことはない。實はそう六かしい筈ではない譯であるが、所謂古い歌にいふ通り「子を思ふ故に迷ひぬるかな」で、人の親の心は素より闇ではないのであるけれども、愛ゆゑにこそ迷ひも出る。間違ひもする。言ひかへれば「子供の爲め」を思へばこそ「眞に子供の爲め」でないことも起るのである。其の鹽梅の兩極端が甘過ぎと辛過ぎとの二種になる。

極端なあまやかしの弊は、誰れも知ることでない。

ふ迄もない。諺にいふ「あまやかし子を捨てる」の理で、溺愛の淵は却つて子供の不幸である。いなりほうだい、はいくと子供の御機嫌ばかりとつて、子供天下に育て上げれば、成る程其の時は子供も安樂であるかも知れない。子供の得意な顔を眺めて、親の心も嬉しいかも知れない。併し、其の態だらくを見て、坊ちやまは結構なことで御坐いますといふのは、前の長屋の婆さんの無責任なお世辭で、眞にその子の爲を思ふ伯父様の心ではない。斯ういふ風に育てられた子供ば、第一に我ま、増長、自ら己を制するといふ、こらへ力の發達がまるで出来ない、上はべの強者、實は極くの意氣地無しが出来上がる。第二には正當に人を憚るといふ優しい訓練のつきようがない。いちけた、不正當に、人を憚り怖れる習慣に比べては、子供としてはまだ此方に取得があるかも知れないが、貴い人格の完成の爲には大いなる缺點となる。自

分の目上といふ類のつゝまじさも無くなつて、無遠慮無作法千萬な人間が出来上る。之れも子供かはゆいの手加減が過ぎた結果である。古い川流に「やみ上り親を遣ふが癖になり」とある。此の子はほんとうに勝手な子だよと口でいひながら、矢張り一々子供に遣はれて居る甘い親も少ない。わけでも此の類は母親に多いのである。折角父親が厳しく引締めて行つても、目の前の可愛さにとろげて、母親があとから／＼其の締めく／＼りを解いてゆく。之れも古いものに「母親はあとから釘をぬいてゆき」といふのがあるが、躰はあとから／＼毀れて仕舞ふのである。

あまやかしの反對は、辛過がてある。厳し過ぎである。世には子供の教育は厳しくさへあればよいと思つて居る人も少くないが、之れ亦過ぐれば尙及ばざるに同じく弊がある。殊に厳し過ぎに伴ふいろ／＼の叱り方の中には甚だ誤つたものが多

い。一體世間には、小言をいふことが即ち子供の教育だと思つて居る人が少くないが、之れは根本的間違ひである。實は小言は教育上最も下手な手段なのである。若しほんとうに行き届いた教育者があるならば、小言などとは一つも使はないでいゝ筈なのである。それを何かといへば子供に小言ばかり云つて居る人は、自分の教育の不行届を自白して居る人といふ譯だ。殊に、子供の爲めと名のつく小言の中に、實は自分の痼癪がもとになつて、腹癒せ半分であることが屢々ある。私は之れを「怒り叱り」と名をつけて居るが、非常な非教育的なことである。腹立ちまぎれに拳固の一つも呉れて置いて「子供のため」が呆れるのである。但し、「怒り叱り」はそう烈しい叱り方の場合のみではない、外見は上品らしいお小言の中に、随分此の類に入るものが少くない。自分の機嫌次第、其の日／＼の風の吹き廻し様で、氣まぐれ千萬の

叱り方をする「お天氣叱り」なども矢張り此の一つである。

全體苟も子供を叱るといふ場合には、其の惡戯なり、其の強情なり、眞に子供の爲によくない點を明かにして、その點をしつかりと叱るべきである。即ち言ひ方を換へていへば、純ら子供を標準にして、其の子供の爲に叱るべきである。少しでも此他の理由で、或は大人の自分の都合からとか、人まへとか、そんなことで叱ることがあつてはならぬのである。さうしないと、小言は却つて子供の害になる。叱り方の巧拙も大事なことであるが、叱る時の我が動機の誤り程、子供に悪い、恐ろしい影響を與へることはない。

小言について誤用され易いことは、干渉の濫用である。子供を可愛いと思ふにつけて、親の干渉は募り易いものである。併し、之れ亦、自分本位の干渉と子供本位の干渉とは、相似て非常な違ひで

ある。一ト通り子供のためといふ許りでなしに、先きの先きを見通しての子供の爲でなくてはならぬ。つまり、自分本位の干渉は氣短にせつかな、目の前のみ狙ふ干渉になる。従つて、大きいことでも小さいことでも、一から十まで、一々自分の思ふ通りにさせやうとする。さうすると、假令始めは子供のために出た干渉でも、いつしか大人の我意の遂行になる、其の結果は一方には前の子供天下と同じ様に、萬事自立力のない意氣地なしの子供が出来る。又一方には干渉のうるさゝに反抗して、ひねくれ者か、虚偽者が出来る。吾等は、干渉々々、事ごとに手も足も出せない様に育てられて、氣の抜けた様な「おとなしい」子供を時々見る。さうかと思ふと、干渉に矢鱈そののかされて、室咲の花よりも散り易い、ませた早熟の子供に遇ふこともある。みんな間違つた「子供のため」の犠牲なのではあるまいか。

三 親の虚榮心

之れも名は「子供の爲」である一つで、實は大
人達の虚榮の爲である例が世に澤山ある。先づ誕
生間もないお宮詣りから既にそろ／＼之れが始ま
る。但し舊い慣例に従つて、子供を先づ氏神様へ
お詣りにつれてゆくといふ、その元來の敬神のこ
ゝろを決して兎角くいふのではない。それは誠に
美はしい親の情の發露として世に貴いことゝの一
つとは思ふのであるが、惜しいかな、それにも、
親の虚榮が、またしても我々の眉をひそめさす。
七五三のお祝ひがまた同じである。私は神田の明
神様などで、美々うく重い着物に着飾られて、重
いボツクリに足枷をされて、お母さんと乳母に兩
方から手をひつばられて、あくびをしながらお鳥
居をくやる、疲れた、だるさうな、睡さうな私
はもういやだといふ氣力さへ盡きたやうな、紅お
白粉で塗りつぶされた可憐の子供の顔を、顔をし

かめて見たことが幾度もある。それからまた、例
の何々講中のお稚兒様といふのが、矢張り之れと
同じである。七、八歳から下はいたいけな三、四
歳の兒で、厚化粧に頬紅させた天童姿は、遠く望
めばお人形様の様に立派だが、近づいて見れば、
口に照されて、長い／＼行列を埃まみれに疲れき
つて、汗に班な白粉も汚らしいが、けたるさうな
目に何の生氣もない、大人のいふ理屈を聞けば、
子供のための功德かも知らぬ。併し、迷惑なのは
其の子供である。何さんでは縮緬の何枚重さね、
どこの家では京へ誂へた染めがどうのと、つまり
は親達の虚榮の張りくらの道具に使はれて居るに
過ぎぬ。我が子美しく飾り度い親心の一通りに對
しては、素より窟屈な野暮をいふではないが、子
供の爲はどこまでも、眞に子供の爲であつて欲し
い。殊に段々子供が成長して、さなきだに女の子
などの虚榮心の高ぶり易い頃になると、此の種の

親の虚榮心なるものが、どの位子供の品性に悪い影響を與へるかわからない。前の幼い時分の、體に與へる影響よりも尙々怖ろしいことになるのである。それからもう一種、害の多い虚榮がある。これは先づ、例のおつむてんく、ばんじやいくの頃から始まる。坊やお客さんがいらしたよ。例のとつときの藝當をしてお目におかけといった風で、ほんの可愛らしいお愛相の一つ二つなら兎に角く、も一つく、まだく、えつ、昨日は出来たのに、今日はなせ出来ないの、そらくこれでも出来ないのと言つた調子で、お客様の喝采を強請する。心ないお客様も亦い、氣になつて、半分は面白く、半分はお世辭か何かの積りで、坊ちやんおえらいくなど、嘸し立てる。大人ならば疾くに五月蠅と大喝もすべき處を、子供だからこそ機械的に「いゝお顔」もすればおつむてんくも繰りかへす。私は斯ういふのを慈愛的虐待と稱

して居る。これが學校へゆく様になつては益々以て嵩じて来る。個性に應じ、天分の能力に従つて其の子供相應な成績を期待するといふ正しい考へは忘れて仕舞つて、何でも性急なをして、過度な要求をくとする。それがまた子供のためといふ名のもとに、根を洗つて見れば實は親達の虚榮から出て居るのである。斯うして世上幾多の不自然な早熟兒が出来る。ほんの一時の評判のあとのみじめに萎びてゆく早熟早衰の子供が出来る。而して斯ういふ悲惨のことが「子供のため」と稱されてゐるのだから遺憾ではないか「子供のため」と「眞に子供のため」とは、是に至つて雲泥萬里の差になつて来る。

四 現在主義を排せ

斯う數へ上げてゆけば殆んど限りがない。が要するに「眞に子供のため」の要點は何處にあらうか。箇條書に掲げてゆけば、之れも幾つにでもな

ることと思ふ。併し、私は最も大切な點と思ふ一つを以て、此のお話を結び度いと思ふ。それは外でもない。教育上の現在主義を排せよといふことである。子供の目の前の幸、不幸にのみ氣を奪られないで、遠い將來の幸福を目あてに、遠い大きい落付いた慮をせよといふことである。吾々は常に此の心懸を失ふては色々の誤りを仕出かすのである。よくいへば餘り氣を小さく「子供のため」に思ひ當るからでもあるが、惡くいへば深い考へのないことになる。一時の愛に溺れてあまやかしの過ぎるのも要するに此の爲ではないか。嚴し過ぎる干渉も亦要するに此の爲ではないか。くだらない當座の虚榮に驅られて、あたら行末の大損を忘れるのも要するに此の爲ではないか。其の反對に「眞に子供のため」を思ふものは、子供の眞の將來の爲に、目をつぶつても子供を苦ますのである。小さいことはがまんしても子供の眞の大き

い發達を謀るのである。世に「せつがち」主義、「目のまへ」主義、「みえ坊」主義の育て方程、眞に子供の爲にならぬものはない。吾等の大切な子供達には、明日もある。明後日もある。遠い將來がある。要するに「眞の子供のため」は眞に子供の將來のためである。(完)

本篇は嘗て横濱海國母の會に於て講演したものでありますが再びこゝに轉載しました——倉橋生

